



ドレスデンとターラントの位置関係

1:1160 000 0 10 20 30km

平原で、地質は悪く醜い所である。当地の山林は候の所有である。山林局長は私たちがターラントの学生であるということで、非常によく取り扱ってくれ、宿屋で飲食するのも一切代金は取らないように命じ、無料でラムネやビールを沢山飲むことができた。

しかし田舎市に三十人余の客があったので、宿が不足して随分醜い部屋に大勢で寝ることになった。しかし無料で取り扱われるので、一回は仕方なしに泊まることになった。

食事は一番よい部屋の広間で、山林局長をはじめ山林官等一同が会食した。宿では樅の木葉をもって緑門を作るなど、天皇陛下のご来臨という有様であった。

洋行日誌の内学位試験及び学位授与式の景況（明治二十五年）

● 三月五日 土曜日 快晴

七時起床。午後四時、黒服に改め大学試験席に入る。三人の教授が各三十分ずつ口頭試験を行い、五時十分頃に終わる。こうして暫時隣の部屋に行くように命じられる。暫くして迎えが来たので席に着くと、各教授ヨカン（長老）等の会議で、直ちに私が試験に大いなる榮譽をもって及第したことが告げられた。次いで来る十日によいよ学位授与式を執行することが告げられた。大変嬉しく安心した。

終わって宿に帰ると、家の人々や子供などが集まっていて大変喜んでくれた。子供達には菓子を買って与えてやった。

この日試験をした教授は、造林学では前の大学総長ガエイル氏、森林経営学では教授ウエベル氏、国政経済学（財政学）では枢密顧問官教授プレント氏で、幸いいずれも見事に答弁することができた。これは私の生涯において、最終の受験といえるものである。夕刻、教授の所へお礼に行き、帰路散歩をする。天気は晴朗にして、名月が中央に踊っているように感じられた。帰宿後、直ちに父上に葉書をもってこのことを報告した。

● 三月九日 水曜日 快晴

七時起床。午後一時より大学の二頭馬車で大学書記を共として、各教授（およそ十五人）、大学総長及び元老を訪問し、明日の盛式への招待を伝える。四時半頃に終わり、明日の用意をして十一時に寝に就く。

● 三月十日 木曜日 曇天（夕刻少し降雪）

六時起床。床屋へ行き髪を剃り、衣服を着替えて支度を済ませる。フラックチリントル（家の主人より借りた物）、白の手袋、白の襟飾り等を全て用意した。十一時に大学からの迎えの者が来た。

大学に着くと、各教授は既に席に着いていた。殊にウエベル氏は心配して、今少し遅ければ自分が私の所へ迎えに行くところだったという。

こうして私は直ちにアカデミー〔専門学士〕の剣を帯び、アカデミーの帽子を頂き式場に臨んだ。教官室から式場に至る間には見る者が山のようにある。私は大学総長と元老ハルチヒの中間に立つて式場に入り演壇に登る。元老が初めに私の履歴を述べ、生年月日、親の名、学業履歴からこの度の大きい論文を紹介して、ドクトル試験に及第したことを賞賛した。こうして今日この盛式を挙行することを凡そ二十分間述べ終わって、私に演説を命じた。私の演説は五十分間に及んだ。

演説が終わり論難に移った。こうして十二時半頃に終わり、校長からドクトルエコノミープリクムという至高の学位を授けられた。

続いて元老からの私への祝辞と来賓への謝辞があった。これで規式は全部終了した。

さて式場には、正面には国王殿下の立画のおよそ三間ばかりのものが掛かっており、その前に演壇がある。両側には各教授が並列して、正面の方に来賓場がある。当日の来賓はおおよそ五百名で、近年希な盛式であったと人々が言い合っていた。しかし、私の演説中には勿論、終始静粛であったことには実に驚くばかりであった。

私は臨場の際、葡萄酒を傾けたので、来賓がこのように多くいたことにも気が付かなかつた。後で教授からの話によって知ったのである。このように多数の臨場があれば、若しも私の演説が不明瞭であるとか、面白くないときには、来賓中に動揺があるのが常であるのに、満場が寂として静かであったのは意外なことであつたと、各教授は大いに賞賛してくれた。殊にウエベル氏は、式が終わるや大いに喜び、小踊りして賞賛してくれたので、私は大いに面目を施すことができ、目出度く退校、帰宿することができた。

さて、私は予てから思っていた。日本人で故郷立出の日から僅か満二年でこの栄誉の式場に登るのは古来未曾有のことであり、当日の演説には力を入れ、私の一身はもとより、日本の名誉を落とさないように心に誓った。そのため先に数日間、独りイルペ川の下流に臨み、激流岩石を砕くところに立って、声の立つかぎり発音して演説の練習をしたのである。一日（八

日前のこと）寒日西山に入り、北風骨に徹し、流水翻りて天に氷、飛雪片々面を撲つとき、漸く演説を終え、まさに帰ろうとして杖を取ろうとすると、杖が凍り付いて抜くことができなくなっていた。かろうじてこれを抜き取ったところ、凡そ尺方の氷片が杖に付いて上がった〔稀有のことでここに記して置く〕。

私のドイツ語の演説の可否は、教授たちの片言で褒め過ぎがあるかも知れない。そのためここに日本人中〔藤本大尉、岩佐、影山来場、外二名は差支え〕、最もドイツ通と称される岩佐氏〔氏は十年間も当府に在留している〕の書面をここに写す。その書面には、「本日は首尾よく御試験も済み、多年の望みがかない御満足のもと、さぞかしと存じます。実は本日がかかと御案じ申し上げ、大学に向いたところ、思いのほか上出来（と申しては失敬ですが、他国人のドイツ語で演説するのは難しいことなので）、同国人の我らも大いに面目が施されました、云々」と申されて来た。

さてまた、当ミュンヘン府大学においてこの儀式を挙げて学位を授与されたのは、中村弥六氏という人があるのみであるという。（もつとも日本人中、医者でドクトルになった者は三名程いるが、この正式を行ったことではないという）。そのため当地の新聞は前日からこの事があることを書き立て、また大学では前日から揭示場に案内状を掲示するなど、来賓の多数であったことなど、実に身にとつて光栄の至りであった。また友人が言うには、不思議に落ち着き払って、声高らかに演説したのには驚いたと言う。後の記念のために、当日式場のまゝを写真に撮らせたので、まもなく御覧になれることができるだろう。

さて又、ここになお記すべきことは、宿の子供の親切なこと、並びに宿の夫婦の自慢話で、主人は近所の料理屋、床屋、その他知る人、見る人とごとに私のことを自慢げに話すので、近所の者からも喜びの言葉を述べられ、何処へ行つても人々に賞賛されることであり、かえって甚だ窮屈な思いをしたことである。

ああ、今日はこれいかなる吉日であるか。思うに私の生涯における栄誉の壇に登る最初の第一歩というべきである。